



京都大学
KYOTO UNIVERSITY

総合人間学部／人間・環境学研究科
Faculty of Integrated Human Studies / Human and Environmental Studies

No.

71



2023.10

総人・人環 広報

特集 新任の先生方より

作品の「生」を眼差すこと——着任のご挨拶.....	田口 かおり.....	3
京大から東アジアを考える.....	KWAK, Minseok	4
研究室からの眺め.....	菊池 亨輔.....	5
着任のご挨拶.....	脇谷 草一郎.....	6
着任のご挨拶.....	原 壮太郎.....	7

連載企画 「総合人間学とわたし」

言語学の目的と総合人間学.....	守田 貴弘.....	8
「総合的人間」とは、空を飛ばない弱い超人のこと.....	小倉 紀蔵.....	10

新任の先生方より

作品の「生」を眼差すこと——着任のご挨拶

田口 かおり

(人間・環境学研究科 芸術文化講座/
総合人間学部 人間科学系)



2023年4月に総合人間学部人間・環境学研究科に着任いたしました。出身地の東京から、ミラノ、フィレンツェ、京都、山形、神奈川など、いくつかの街に移り住みながら学び働き現在に至ります。本学を修了したのは2014年、東海大学教養学

部での勤務を経てほぼ10年ぶりの「帰京」になりますが、歩き慣れた左京区の小道を辿り、吉田山を見上げるたび、懐かしさに心沸き立ちます。

私の専門は、芸術作品の保存修復学です。研究の1つの柱は、西洋の保存修復理論と保存修復史の再構成です。神殿や絵画、彫刻などの保存修復は古代から世界のいたるところで行われてきましたが、その詳細は「隠された技」としてひそやかに伝承されてきた経緯があり、時代変遷の実態や理論と実技の相関性があまり明確になっていません。私の関心は、近代イタリアの美術史家チェーザレ・ブランディ(1906-1988)の修復理論と、同時代の美術史家や修復士たちが展開した、作品の「生」をめぐる思考を手掛かりに、各国の技法とその背景にある思想を検証することにあります。

2つ目の研究の柱は、実践的な保存修復です。これまで、国内外の美術館で、フィンセント・ファン・ゴッホ、クロード・モネの油彩画をはじめとする収蔵品の修復と研究を行ってきました。近年は、経年の過程で構造が脆弱化したり、再展示に困難が伴ったりなどの問題が山積みな現代美術の事例に携わる機会が増えています。リサーチの過程では、制作から今日に至るまでの作品のタイムラインを再構成し、美学・美術史的な考察を踏まえた上で、どのような未来が作品にとって望ましいのかを見定め、介入の手法を決定していくことを目指しています。

授業では、保存修復学的な視点から作品を分析する試みを取り入れています。学生の皆さまと出会った半年ほどが経ちますが、京都の街に身を置き

学ぶ環境もあってのことか、お一人一人が文化財の保存や継承に高い関心を持ち、市内の神社仏閣の修復プロジェクトについても積極的に情報を収集し考察を練り上げる様子を目にすることが多く、嬉しく思っています。グループワークにおいてとりわけ印象深いのが、作品を「見る」ことに取り組む粘り強い姿勢です。この点を強調するのは、保存修復という分野がまさに、目の前の対象から得られる複数のイメージと情報を読み取る作業、つまり「見る」ことを大切にするからです。

保存修復の現場では、モノとしての作品の成り立ちを把握するために、不可視的なもの——内部構造や隠された修復痕跡、過去の描き変えなど——にも目を凝らし、組成と制作技法を詳らかにすることが求められます。肉眼で捉えられる情報には限界があるので、紫外線や赤外線をはじめ異なる波長の光をよすがに物理的な構造を検証する作業や、僅かな剥落片から破損の原因を突き止める科学調査が必須となります。目に見えないものをも「見る」、その多様な眼差しと専門性が交差するなかで作品を解釈し思考する保存修復学の実践においては、美学、美術史、歴史学、科学などの学術領域が複雑に絡み合っています。ある意味において、保存修復学の根幹にある諸分野の融和と協働の性質は、本学の改組の理念である「学術越境」と高い親和性があり、2023年という節目の年に本学で新たなスタートを切ることができた巡り合わせを幸いに思います。

作品を「見る」こと、そして望ましい保存修復の方法を多角的に検証することは、作品の「生」について考える行為であり、同時にその作品の「生」を編みあげる作品の外のもの——人と作品、ひいては人と人の関係性やその「生」のプリズムの諸相を見つめなおす行為でもあります。

研究と教育に勤しむなかで、軽やかな足取りをもって、教員や学生の皆さまとも豊かな関係を切り結び、前へ進んでいくことができればと願っています。

(たぐち かおり)

新任の先生方より

京大から東アジアを考える



2023年5月に人間・環境学研究科の講師として着任しました。10月からは、トランス東アジア文化思想論の授業を担当します。

私は日韓比較思想史を専門としていますが、「東アジア哲学」というより広い枠組みで研究・教育

を行っていきたいと考えています。京都大学から韓国・朝鮮のことを、また東アジアのことを考える機会が頂けたことを大変嬉しく思っています。

私は2010年、韓国の高麗大学に入学しました。専攻は中国語中国文学でした。2010年は、中国のGDPが日本を抜いて世界2位になった年でもあります。当時、韓国社会では、中国に対する期待が高まっており、中国を知ろうとする雰囲気がありました。

高麗大学の中国語中国文学専攻は、語学や文学だけでなく、中国社会、中国文化、中国映画など中国のこと全般を学べる場所で、特に必須科目の「中国古典講読」は、実用性に偏らない教育を方針とする高麗大学中文学科の象徴ともいえるものでした。

しかし、「東アジアとは何か」をより本質的な次元から知りたかった私には、専攻の科目だけでは何か物足りない感じがしました。そこで、哲学を副専攻に選び、東洋哲学の科目をむさぼるように受講しました。なかでも道家哲学の授業は課題の量が多く、担当の先生が大変厳しい方でした。専門が専門であるだけにゆるい授業かなと思ったら、授業初日に「専門は自分の性格と正反対だ！」と宣言されたほどです。その教授は京都大学で博士号を取られた方だったので、京大の中国学について授業中によくお話をされました。要約すると、「いまの韓国と日本の学者を全部集めても昔の京大の中国学には及ばない」ということでした。これが本当かどうか私には判断できませんが、このようにして京都大学という名前が私の脳裏に深く

KWAK, Minseok

(人間・環境学研究科 東アジア文明講座／
総合人間学部 文化環境学系)

刻まれました。

2年間の兵役を終えた2014年、私は交換留学生として京都大学にきました。それほどすごいなら直接京大の中国学を経験してみたいという気持ちだけではありませんでした。そのとき私は「東アジアとは何か」について考えていましたが、東洋哲学を勉強してみてもよく分かりませんでした。一方で、東アジアという自己認識は「近代」の経験に強く規定されていることに気づきました。そして、東アジアにおける「近代化の関門」だった日本を理解しなければならないと考えたのです。

この時の所属は文学部中国語学中国文学専修でしたが、東アジアを理解することに役立つようであれば、他学部の授業もなんでも履修しました。そこでたまたま出会ったのが、総合人間学部の授業でした。大学院の授業と一緒にゼミ形式の授業で、東アジアのことであれば、自分の問題関心に基づいて自分の発想で研究を進めることができました。私はいち学部生、しかも留学生でしたが、数十ページの論文(いまから考えるとただのエッセイ)を下手な日本語で書いて皆さんの前で発表する機会をいただきました。考えることも、自分の考えを文章でまとめることも、それを皆の前で発表することもとても楽しかったです。これが研究というものなら研究をしたい、と私は強く思いました。

2018年、再び京都大学に戻りました。今度は人間・環境学研究科でした。修士、博士課程の間、東アジア思想を研究する先輩後輩の方々はもちろんのこと、ドイツ思想や経済理論など、多様な領域の研究者たちと交流しながら得たものは計り知れません。

「東アジアとは何か」という課題は、まだ解決されていないまま、私の目の前に横たわっています。この課題に取り組むなかで京大と出会い、また研究者を目指すことになりました。これからも、京大から東アジアを考えられることを大変嬉しく思います。

(カク ミンソク)

新任の先生方より

研究室からの眺め

菊池 亨輔

(人間・環境学研究科 共生世界講座/
総合人間学部 国際文明学系)



2023年4月に着任しました。それまで属していたのは、広島大学の法科大学院。周囲の先生方はすべて法律学の専門家、そして学生もほぼ全員が法律家志望でした。私の専門とする法哲学は、一応は法学の仲間には入る

けれども、特定の法律内容を研究するわけではなく、司法試験科目でもないため、法科大学院という場においては傍流的存在です。ところが、総人・人環はあらゆる分野の研究者が集いますし、学生の関心・進路も本当に様々です。もはや何が本流かわかりません。野菜畑からジャングルに移ったような気分です。

私には昔から、すぐに辞めたくなるという「困った癖」がありました。中学から高校に進学したときも、地元の北海道を離れて京都大学法学部に進学したときも、馴染めないと感じて入学直後に辞めようとしていました。そのときは周囲にも恵まれたおかげで、辛うじて踏みとどまりました。

その当時、私の前任の前任にあたる西村稔先生の全学共通科目を受講した記憶があります。ヨーロッパ各国における法律家養成制度の歴史を比較する授業だったはずですが、そもそも日本法の初歩すら知らないときでしたので、その内容には大いに困惑しましたが、それ以上に驚いたのは授業スタイルです。教科書もレジュメもパワーポもなく先生が滔々と話し続け、ときおりの板書はほぼ原語とカタカナ語の表記のみ。高校までとの学びの違いを知るうえで、非常に教育効果が高い授業だったと今では思います。

学部時代は研究者になるつもりなどなく、地元で暮らせそうな公務員に就職しました(こうした平凡さは、人環ではむしろ珍しいかもしれません)。ところが、ここでも「困った癖」が発動し、

今度は本当に辞めてしまいます。その後またしても人に恵まれ、京都大学大学院法学研究科にて研究者を志すことにしました。

法哲学はときに何をやってもよいと言われるくらい幅広い領域に開かれているのですが、私自身はこれまで、法の解釈・適用の方法、そして裁判における法的理由づけの様式に関心を持ってきました。法学や裁判は確かに堅苦しく、杓子定規な判断や形式ばった理由づけにあふれています。それには理由がないわけではなく、法の世界は、公正中立、法の支配、法的安定性といった価値を重視するからです。しかし、そのような外観の陰で判断者の主観や常識などが混入しており、法は不確定だという見方もしばしば表明されてきました。行儀がよくない私はこのような見方に惹かれ、法的レトリック、ドイツの自由法論、アメリカのリーガル・リアリズムなどをこれまで研究の足場にしていきます。ただし、法は不確定とはいっても、何でもありではありません。あくまで、公式な法のことばによって語り続ける(あしざまに言えば、取り繕う)という制約のなかで法的思考は進められるからです。その加減をうまく捉え、あるべきかたちを提示するのが一つの目標です。

着任して真っ先に好きになったのは、京都盆地東側の山々が見える研究室からの眺めです。京都らしさもありますし、開放感にあふれています。もちろん、景色のよい部屋が当たったのはまったくの偶然です。しかし、その眺めが開放的に感じられるのは、京大そして人環という空気を吸ったからでしょう。母校の懐かしさもありながら、異世界のような場所です。現在は、例の「困った癖」も出ていません。多くの偶然に感謝しつつ、できることを一つ一つ積み上げていき、私なりの色と空気感を総人・人環に付け加えていきたいと強く思います。

(きくち きょうすけ)

新任の先生方より

着任のご挨拶



本年4月から文化・地域環境講座で客員准教授としてお世話になっていきます。本務では独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所（以下、奈文研）に勤務しており、主に遺跡から出土する遺物や遺跡そのものの保存修復に関する調査・研究

に従事しています。

高校時代に化学と中国古代史に興味を持ち、文理いずれに進学するか迷った結果、いずれも学べる学部と期待して京大総合人間学部に入學、卒業後は人間・環境学研究科で学びました。学部・修士の間は地球化学の一分野である水圏化学を学んでいましたが、一方で、京都や奈良の古社寺で仏像などを時々見て回っていました。そのようなこともあってか、将来の進路を考えた時に、水圏化学で学んだ分析の経験を文化財の保存に役立てることは出来ないものかと考えました。そこで、当時、奈文研で保存科学を担当されており、人環の客員教授を務めていらした澤田正昭先生をたずね、博士課程からお世話になりました。その後、奈文研に就職し、こうして人環に客員教員として戻って参りましたので、自分が学生の立場で籍を置いていたところに戻ってきたこととなります。

修士課程まで地球化学を学んでいたこともあり、博士課程では遺跡の保存をテーマに学びました。しかし、奈文研というところは隣接する平城宮跡はもちろん、常に現場を持っていますので、私が所属した研究室でも保存の“事業”が進行している具体的な現場が常にありました。そのため、研究のスタンスとしては、遺跡保存に関連する特定のテーマを深化させるというものよりも、遺跡保存に必要となることを俯瞰して何でも学ぶというスタンスでした。当時の奈文研の研究室長で後に指導教官となる肥塚隆保先生が岩石学をご専門

脇谷 草一郎

(独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所／埋蔵文化財センター 保存修復科学研究室室長 人間・環境学研究科 文化・地域環境講座)

とされていたことから、まずは岩石について学んだところ、その面白さに気づき、暫くは調査で訪問する各地で石を見て回っていました。その後は、遺跡保存においては、遺跡周辺の地盤から空間中も含めて水分移動を把握することが重要であることから、土壌物理や建築環境工学を学びました。その過程で、様々な先生と知り合う機会を頂き、各分野の物性測定ノウハウを教えて頂いたり、フィールド調査に参加させて頂いたりする中で、改めて学ぶことの面白さを体感しました。これら様々な分野で培われた知見を遺跡保存の現場に活かすことが出来るようになり、工学的には遺跡保存の新たな視野が開けたように感じ始めた時に、今度は技術的な知識だけでは決して文化財の保存が図れないことを改めて知りました。つまり、文化財の“保存”とは文化財が内包する“価値の保存”であって、文化財の“物質的な保存”だけでは成し得ない局面があるということです。ということで、今度は文化財が内包する価値について、そしてその価値を保存するということの理念について、考古学、歴史学はもちろん、建築史、美術史などの先生方との交流を持たせて頂きました。もちろん、この点において、自分が論を張れるわけではないのですが、新たな交流が生まれました。結果的には学際的な学びとなったところもありますが、一方で自分の中で何かの専門家になったという感覚に乏しいのも事実です。

これからは人環の研究室の門をたたいてくれる学生さんと協働しながら、専門性を改めて深化させて参りたいと思います。普段は奈良で執務していますので、人環の先生方、学生の皆様となかなか交流の機会には恵まれません、奈文研とはまた異なる専門性を備えた人環の皆様と少しずつでも交流を深め、新たな環境での学びを楽しんで参りたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

(わきや そういちろう)

新任の先生方より

着任のご挨拶



今年の4月に人間・環境学専攻、地球・生命環境講座に特定助教として着任しました。一昨年までは人間・環境学研究科で学生として学んでいたため、教員として働く戸惑いがまだまだありますが、

周りの先生や職員の方々のサポートのおかげで新しい状況に慣れてきたところです。

私の専門はカエルやイモリといった両生類の系統分類学であり、特に形態を中心に研究を進めています。分類学の歴史は生物学の中でも特に古く、アリストテレスの時代にまで遡り、その後はリンネによって現在まで続く分類体系が確立しています。

このような先人たちによる分類学の確立のおかげで、私たちは地球上にいる膨大な数の生き物を整理することが可能になりました。さらに、ダーウィンとウォレスによって進化論が提唱されたことで生き物の進化の過程を反映して分類学を構築する系統分類学が始まっています。しかし、最近になってDNA解析のような分子系統解析技術が発展したことにより、系統分類学を取り巻く状況が大きく変化しました。

従来の形態を用いた分類は、生き物の系統関係を構築するときに識別形質の数が少なく、収斂進化のような複雑な現象もあるため、しばしば研究者によって意見が異なるという問題がありました。一方で、分子データは塩基配列という単純かつ膨大な情報に基づいて比較し、形態より客観的に生き物の系統関係を示すことができます。この

原 壮大朗

(人間・環境学研究科 地球・生命環境講座／
総合人間学部 自然科学系)

ため、多くの系統分類学者が分子情報を利用するようになり、形態学的研究はなおざりになってきました。

ただ、分類学において形態を完全に無視することは絶対にできません。例えば、化石など形態しか利用できない標本と比較する際は形態情報が必要不可欠になります。さらに、形態的特徴から特定の種を同定することができないという問題も出てきます。みなさんも捕まえた生き物がDNAを確認しないと何者か分からない状態では困りますよね。私は、分子情報で系統関係が明らかとなった分類群を対象に発生データなどの新しい情報を駆使しながら、形態情報の改訂および更新を日々行っています。

今は両生類の系統分類について研究している私ですが、学部と修士課程は水産系の大学に所属しておりました。そこでは、練り製品の原料となるエソという魚の小骨を如何に取り除くかという水産に関わる研究をしていました。一見すると系統分類学的研究とは関係なく、当時は私自身も無縁だと思っていました。しかし、博士課程学生として両生類の系統分類学を始めたとき、形態を専門に研究する研究者があまりいない中で形態の研究を始めることができたのは、修士課程で培った形態に対する観察やスケッチの技術があったからに他なりません。研究でも社会でも何が役に立つかわからないものと、つくづく実感しました。

総人、人・環は文系と理系が共にある京大らしい体制をとっています。多様な専門分野の人が在籍しているので、幅広い知識を吸収しながら独自の道を切り開いてほしいと思います。

(はら そうたろう)

連載企画「総合人間学とわたし」

言語学の目的と総合人間学

守田 貴弘

(人間・環境学研究科 言語科学講座／
総合人間学部 認知情報学系)



私の専門分野は言語学である。そして、一般の人や無邪気な学生からぶつけられて困る質問が2つある。1つは「どれくらいの数の外国語がしゃべれるんですか」・・・話

せません。日本語でも言いたいことがうまく言えているかどうか自信が持てないというのに、フランス語でも英語でも、用を足すことくらいはできても・・・というのが正直なところである。だから、素直にこう答える。「日本語と、一応はフランス語と英語で、3言語ですね。言語学って、別にたくさん言語をマスターすることが目標というわけではないので」。がっかりさせて申し訳ないという思いがある一方、本当のことなんだから仕方がないと開き直るしかない。主な研究対象としているフランス語については「文法的に正しいかどうか」だけではなく、「フランス語として自然かどうか」という判断がある程度のところまではできるように努力はしてきたつもりである。しかし、これは文学であれ哲学であれ、どんな学問をするにしても外国語の能力が求められる分野であれば当然のことであり、私が言語学者として生きていく上での目標ではない。

がっかりした相手は当然だが、困る質問その2を繰り返してくる。「では、言語学というのは何を目的とした学問なのですか」。大きな声で言うこと

ではないが、私はこの問いに対する明確な答えを持ち合わせていない。言語 X の文法の記述、言語 Y と言語 Z の類似性と相違を明らかにすること、普遍的な言語構造の発見や、言語という人間に固有の能力が可能になった仕組みの解明など、いくつもの模範回答が思い浮かぶ。そして、そのすべてに賛同しつつ、同じくらい納得できないところもあるので、私の答えはそのときの気分に応じて変化する。言語学者ごとに違う答え方をするのだからからそもそも仕方がないことだとも思うのだが、ここではもう少しだけ丁寧に、自分の抱えている問題意識 = 研究目的のことを考えてみたい。

元々は、漠然と意味が伝わる仕組みに興味があった。同じ内容を話しても、うまく通じる相手がいれば、そうではない相手もいるのはなぜなのか。「あ、うまく伝わった」と感動を覚えるような経験をしたこともあるが、「こいつにはどうやっても話が通じない」と絶望したことだってその何倍もある。なぜこのようなことが起こるのか。その答えを言語学に求めてしまったことにより、私の根無し草としての生活が始まることとなった。言語の中に手がかりがあるような気もする一方で、山中で無くした何かを求めて浜辺をさまよう愚行のようでもある。学部時代の判断ミスである。

それでも、院生時代は自分のやりたいことはこんなことではなかったはずだという思いを抱えながらも言語学を続けた。「このまま続けていてもおもしろいことはないのではないか」と明確に認識

したときには、この世界を離れようという判断をしても許される時期をとうに過ぎていた。しかしそれから数年後、博士論文を書いている終盤くらいの時期に、急に視界が開ける感覚があった。その当時に開始した、人やモノが空間内を移動し、それを言語でどのように表現するのかという研究を今でも続けているわけだが、空間という、客観的と思われがちな現象であっても言語で表現された瞬間、まったく別のものになる。実験をしてデータを集めるようになってからはいっそう、目で見えているものと言語表現の隔たりは劇的なものだと思うようになった。これは「話が通じない現象」が生じる直接的な理由にはなっていないものの、この現象が起こる現場は複雑な気持ちのやりとりなどではなく、もっと身近な場所にいくらかでも存在することがはっきり分かった。少なくとも、目を見た世界を把握する時点で違いが生じていることが理由の1つにはなるだろうということ、そして、そこに言語構造というものも関係していると思えることも私の気持ちを軽くしてくれた。判断ミスだと思っていたものが実はファインプレーだったのかもしれない。

途中、哲学に傾倒したり進化生物学や心理学の文献を渉猟したりといった時期もあり、今でもそういう傾向は多分にあるのだが、言語学でできることもかなりたくさんあると今では思えるし、自分の知りたかったものに、少しずつ近づいているような気がする。欲を言えば「目を見た世界の把握」というところでもう少し厳密にできないものかといった不満もあるのだが、今後の展開は今後任せることにして、自分は言語学の中でできることをまずはがんばって、さらなる欲は学生に期待してもいいだろうと思えるくらいに歳もとってしまった。そもそもの言語学に対する不満には、言語にまつわる現象は広いはずなのに、言語学がやっていることは狭く、あまりに表面的に過ぎる

というものだったはずなのだが、その表面を支える何かが寄り道のおかげで身についたのかもしれない。あるいは、言語学を続けることにより、別の何かを考えるときの足枷としか思えなかったものが、足がかりになったようでもある。言語というのはすべての人に開かれているからこそ、誰もが自由に考えを述べることができるものではある。しかし、言語を緻密に分析する言語学だからこそ、さまざまな言語に目配せしている類型論志向だからこそ、見えてくる世界があることも確かだと思うのである。

さて、テーマは「総合人間学とわたし」であった。上記の通り、自分がやっているのは言語学であって、総合人間学ではないつもりである。私にとって、総合人間学とは単なる名前に過ぎない。それも、あまりに壮大過ぎてほとんど空虚な名前である。仮に総合人間学と呼ぶに値する何かが私の研究に含まれているとか、私の目的意識を見て総合人間学的だと言ってくれる人がいるならば、組織の人間として嬉しいと思う反面、一研究者としては不愉快でもある。それは、言語学という蜘蛛の糸にしがみつき、虚無感に苦しんだりする中で勝手に育ってきたものであって、私が意図してやったことではない。「言語学がやりたい」という言明は意味をなすが、「総合人間学がやりたい」という言明がほとんどの人にとって意味をなさないことから分かる。このような無内容なことを言う人がいないことを願うばかりだが、もしいたら、私は言語学者としてこう答えるだろう。『総合人間学』は『～をする』のような、既存のモノを対象とする他動詞の目的語にはならない。『構築する』のような作成動詞の目的語として使うか、『何かが総合人間学になる』というように、変化述語として使うものだ。

(もりた たかひろ)

連載企画「総合人間学とわたし」

「総合的人間」とは、空を飛ばない弱い超人のこと

小倉 紀蔵

(人間・環境学研究科 東アジア文明講座/
総合人間学部 文化環境学系)



◆朝鮮（韓国）という参照軸

わたしが研究しているのは、「東アジア哲学」です。これは、中国・朝鮮（韓国）・日本を横断的に考える哲学のことを指し

ています（というか、わたしが勝手にそう考えています）。これまで中国のことは中国専門家が、朝鮮のことは朝鮮専門家が、日本のことは日本専門家が研究するという傾向が強かったのですが、それでは見えないものが多すぎます。果敢に壁をとりのぞいていかないとなりません。

たとえばいまわたしは日本の鎌倉時代の思想を研究していますが、鎌倉仏教に関するこれまでの先行研究も、「日本」という枠組みのなかだけで考えすぎています。その枠組みから出ようという研究者も、インドや中国との関係には言及しますが、朝鮮はほとんどの場合、欠落しています。これではダメだとわたしは思うのです。

日本の平安時代以降の仏教や、その影響を受けた文芸・芸能などはほとんどすべて、天台哲学の著しい影響を受けているとわたしは考えます（一例をあげるなら、世阿弥の娘婿の禅竹は能の思想を天台哲学で説明しています。藤原俊成の歌論はいうまでもありません）。すると、朝鮮では高麗時代にあれほど天台哲学が盛んだったのに、やがて華嚴と禅の合体思想が天台を圧倒し、高麗後期から朝鮮時代末期にかけてほぼそれ一辺倒になってしまったことと、当然比較してみる必要があります。

す。なぜ日本では天台哲学が近代にいたるまで陰に陽に強い影響力を持ったのに、朝鮮では華嚴・禅の合体がいまにいたるまで仏教界をほぼ支配してしまったのか。同じく中国の影響を強く受けながら、平安時代（日本）、高麗時代（朝鮮）より後の文化・文明の方向性が、日本と朝鮮ではがらりと変わってしまったのはなぜなのか。

これは拙著『群島の文明と大陸の文明』（二〇二〇）でも語ったことなのですが、韓国の文化学者である李御寧が名著『「縮み」志向の日本人』（一九八二）を書いたとき、土居健郎の『「甘え」の構造』（一九七一）を批判しました。土居は西洋と日本を比較して〈「甘え」こそ日本人に独特な文化だ〉と主張したのですが、李御寧は、〈韓国人の甘えは日本人よりもずっと広くて深い。日本と西洋を比較しただけでは日本文化論にはならない。韓国文化と比較しないと日本文化のことはわからない〉と批判したのです。そして、そのことばのとおり、これまでの日本人が発想すらできなかった傑作『「縮み」志向の日本人』を書いたのです。李御寧が批判したからといって、土居の『「甘え」の構造』に価値がなくなるわけではありません。西洋との比較という軸であっても、日本人の特質を剔抉したこと自体は高く評価できます。ただ、「甘え」は日本文化にだけあるのではないことを直視し、たとえば韓国との比較という作業をしていれば、「甘え」の分析はさらに鋭角的な説得力を増すことになったでしょう。

『「甘え」の構造』と同じくロングセラーとなった中根千枝の『タテ社会の人間関係』（一九六七）も、この本の叙述のどこが「日本社会」のことを

語っているのか、にわかにはわかりません。すなわち韓国社会に関してもまったく同じことがいえる内容を、「日本社会の分析」として語りすぎているのです。中国・インド・チベット・イギリス・アメリカとの「比較」が語られはしますが（それも身近なアカデミアのひとびとの観察にすぎないものが多い）、論理的にいうなら「性急な一般化の誤謬」を犯しすぎています。

◆総合的人間とは

わたしにとって「総合人間学」というのは、まずは自分の守備範囲から外に出て行って、ねばりよく観察と対話をし、比較したり補助線をひっぱったりして関係性をあらたに構築することです。いつも「素人」の感覚を忘れないように大切にしています。というより、わたしはいつもどこでも素人です。ですから、「自分はこのディシプリンのプロなのだ。はっはっはっ」といって威張っているひとが、わたしは苦手です。その意味で、わたしがこの部局に着任した十七年まえは、まだ先生方が昔の教養部の雰囲気をも分に残しておられ、青年のような好奇心に満ち溢れていて、大変たのしかったのを覚えています。

さて、本題にはいりましょう。「総合的人間」ということばがあります。ニーチェのことばです。わたしは最近、『弱いニーチェ』（二〇二二）という本を書きました。そこで主張したのは、以下のことです（叙述がこの本と重複してしまいます。申し訳ありません）。

まず、ニーチェのいう人間とは、「^{マハト}ちからへの^{ヴレ}尽」（従来、「権力への意志」「力への意志」などと呼ばれていたもの）によって闘争する多様態です。

人間の生んだ「高い価値」のものに自己同一化するような個人は畜群と呼ばれ、そういう「高い価値」と自己を一致させない個人を総合的人間と呼びます。超人とは、後者の謂です。総合的人間とは、自らのなかに価値の高いものから低いものまで、相対立するすべての要素を無秩序にとりこみ互いに闘争させる生成者なのです。

総合的人間のなかでは、無数の他者やものやことが闘争しています。この闘争の過程で、偶発的にいのちが生まれるかもしれません。その偶発性に賭けること。その偶発的な〈あいだのいのち〉を生きることが、「弱いニーチェ」的に生きることなのです。

なぜ「弱い」のか？

「弱い」の反対の「強い」というのは、あらかじめ一切の善、徳、真、超越、普遍、統体、永生などというロバスト（強剛）な虚構と一体化しようという戦略のことです。「弱い」やり方とはそういうものをすべて否定して、動物のように反客観・反俯瞰・反全体のままとして生きることなのです。人類史をしてみるならば、善、徳、真、超越、普遍、統体、永生などという価値を手に入れた個体や集団が勝利してきたのは事実なので、これらと一体化しようというのは「強い」やり方なのです。しかしそれらの価値を「高い」価値として宣揚し、そこに向かって疾駆していくような「強い」精神は、墮落して腐敗しているのです。

そのように考えたニーチェは、「強い」やり方、「強い」価値、「強い」精神などを否定し、自らはその正反対の「弱い」方向性に向かって疾駆しました。ニーチェ自身のことばでいうなら、そのような方向性の精神こそが逆に「強い」わけですから、彼の著作のなかに出てくる「強い」という形容詞は、通常の意味とは逆に、〈「弱い」方向性を選びとることができる〉という意味なのです。

「超人」や「強い人間」や「高貴な人間」などというニーチェのことばを、「強いやり方を好み、強いものを身につけた強いひと」というようにトートロジカルに解釈してはならないと思います。超人は、空を飛びもしませんし、スーパーマンでもありません。「もっとも弱いやり方を好み、強いものも弱いものもひっくるめてすべて身につけたもっとも多様なひと」という意味です。それをニーチェは、「総合的人間」と呼んだのです。

（おぐら きぞう）

総人環

編集後記

◆『総人・人環広報』第71号をお届けします。今号では、今年度あらたに着任された5名の先生方の自己紹介を掲載しております。この学部・大学院がますます魅力的なものになっていく予感がしてゾクゾクします。「総合人間学とわたし」は2名の寄稿となりました。さて、わたしはこの広報を作成する小委員会の委員

長をしていますので、立場上、いまこうして「編集後記」を書いています。実はこの広報の編集作業は、総務のMさんが担当しました。ですからわたしには「編集後記」を書く資格はほんとうはないのです。Mさん、すみません！ありがとうございました！

(O. K.)

総合人間学部
人間・環境学研究科

広報委員会